



はじめに

私は昭和 35 年 7 月 6 日生まれ、54 歳の鍼灸師である。開業して 21 年。

実は開業前の 20 代から 30 歳くらいまで、霊的世界にどっぷり浸かり探検し続けてきた。ぼくが鍼灸師になったキッカケもそこにある。

本書でぼくが探検した霊的世界を、ありのままに書くことにする。理由は
大袈裟かもしれないが、ぼくが知り得た霊的世界を知的財産として残しておきたいからである。特に次の世代へ。

「霊的世界」この言葉だけで実に怪しい。実際に怪しい世界だった。でもずっと人々は霊的世界を真剣に追求し続けてきたのである。

科学万能と言われる現代社会、その現代物理学の最先端の研究は、そのまま霊的領域と言われている。実際に最先端の物理学者の多くが超常現象、つまり超能力を研究している。

また、我が国の日本文明の大黒柱は神道である。だから日本全国に無数とも言える神社がある。そこでは神主が日々御^{みたま}霊に向って祈りを捧げている。御霊とは御先祖であり、御先祖を生み出し生かし続けた大自然の命までおよぶ。すべての神主の頂点に位置するのが天皇陛下である。陛下のご公務の中心には、すべての我国御先祖の御霊への日々の祈りである。

天皇陛下は我国日本の君主である。天皇陛下は明治憲法では元首であった。ただ、大東亜戦争後の欧米列強の占領下の圧力のため、本来の元首から日本国の象徴、日本国民総合の象徴という曖昧さを帯びた表現となってしまった。

したがって日本は戦後 69 年経っても、今だに占領化意識（洗脳）を払拭できずに至っている。近隣諸国の中韓米露は日本の覚醒を恐れているので、今だに圧力が続いている。私なりの表現すれば、建国以来の神道国家日本を欧米列強は政治的に恐れ煙たがったのである。その一方、欧米列強は日本の文明文化に憧れている点もある。

近代、白色民族国家が武力を背景に、調子よく世界を植民地として征服し続けていた。それに日本人は危機感を感じ、大あわてとなる。もはや時代は、江戸時代という平和を許してくれなかったのである。そこで明治維新を起こし、欧米から身を守る新たな体制として明治憲法を制定し、天皇を元首とし国民は団結する。その上で富国強兵を迫られ、綱渡りのような外交にしのぎを削り続けた。

大東亜戦争開戦前の昭和 16 年当時、全世界の有色人種国家が植民地かされるに至る。そんな中、完全な自主独立有色人種国家は、我国日本だけであった。

厳密には、タイとエチオピアは植民地支配下ではなかったが、タイは現在のベトナムをフランスが、カンボジアをイギリスが両隣で支配しており、両国が遠慮しあってかろうじてタイは半独立状態であったという。エチオピアは戦後、資源があることが分かり、オランダがすぐに植民地化した。

こう見ると当時の覇者の争いの世界で、大東亜戦争を戦った日本の立場がよく見えてくる。まだ、白色人種国家間も覇者争いの最中なので、我国は最後は苦渋の選択でドイツ、イタリアと同盟を結ばざるを得なかった。そしてついに我国は世界最強国アメリカ合衆国と正面からぶつかることになる。今だにアメリカと全面戦争をした国は日本だけである。

私は何度か知覧の特攻平和記念館へ行ったが、日本人の断末魔の叫びが聞こえてきそうな総力戦がピンピン伝わってくる。

私はいろんな戦争資料館へ足を運んだ。そこには祈り（点）の世界、霊的世界が凝縮されていることに気づいた。英霊は生きている。英霊から「今も戦いは終わってないんだぞ〜。子孫よ日本を引き継いでくれ！」と叱咤激励を感じる。

ここまでお読みいただき「霊的世界の探検がなんで歴史の話になるんだ？ 霊的世界の探検に興味津々、怪しくも面白そうなのに…」と思われた読者のみなさま、元田英明は御期待を裏切りません。

私自身霊的世界、超能力や死後の世界はたして存在するのか。存在するとしたらその実態はなにか？これから私が経験した霊的探検の旅を、読者のみなさまと共に楽しんでいきたい。

結論から先に申し上げると、ぼくは霊の世界とは世の中の現実社会のほんの一部のマイナーな存在だと思っていた。それが違った。メジャーであったのだ。いや、世の中の全てであった。

これからそれを綴っていくが、それを証明するために私は挑戦する。

もくじ

はじめに (1)

第1章 元田英明 16歳にして志す! (5)

祖父との会話

日本一周 昭和51年(1976年)

第2章 劇的紀行!世界一周の旅! (11)

昭和54年(1979年) 世界一周の旅へ

東へ!アメリカ編

ゴージャス!ヨーロッパ編

ユーゴスラビア、ギリシャ、トルコ編

まぼろしのルート 中東編

運命を変えたブッダガヤ インド編

昭和55年1月15日 日本に生還!

九州帰省

第3章 心の旅へ (81)

昼は土方、夜は仏教 東京編

比類なき霊能者そして哲学者のY先生との出会い

教祖誕生! 京都編

地獄の特訓13日間! 九州編

第4章 我が師 Y先生との対話 (107)

我が師 Y先生との対話

さらば!研究所!

最終章 おわりに (161)

第1章

元田英明 16歳にして志す！



祖父との会話

ぼくが子どもの頃、家には明治20年生まれの祖父がいた。祖父は夕方散歩する以外には、一日中机の前にあぐらをかいて座っていた。まるでやせた奈良の大仏のようにほとんど無表情で座っていた。祖父の雰囲気は、えも言われぬ威厳があった。そんな祖父になぜか毎日いろんな人が相談にやってきた。祖父はほとんど聞き役だった。

祖父はいつも家にいるので子どものぼくにとって、格好の質問攻めの存在だった。祖父はどんな質問でも、まじめに答えてくれるので、ぼくは質問するのがクセになってしまったのかもしれない。

今でもそうだが、ぼくの人生は祖父のように質問に答えてくれる人を探し求め続けてきたようなものだ。だから自然と本もよく読むようになった。聖書に「求めよ、さらば与えられん」と書かれているが、ぼくの興味関心に応じて次々と質問に答えてくれる人が現れる。自分の成長に応じて「答えてくれる」「教えてくれる」これぞ人生の醍醐味だ。

鍼灸の世界も同じだ。鍼灸治療に特化した書籍を3冊執筆したが、いわばぼくの質問 vs 解答集と言いかえても当たらずといえども遠からずだろう。

人は質問しなくなったら終わり、成長が止まった証拠だ。それは興味関心の意欲がなくなったことを意味するからだ。だから質問し自問し、永遠の悟りを追い続けなければならない。奈良の大仏はそれを具体化したものだ。

ある日祖父は、突然母に「いろいろとお世話になりました」と言い、いつものように昼寝をしたという。2時間くらいしても起きてこない、見に行ったら亡くなっていた。享年94歳、病気らしい病気もせず天寿を全うした。息子の医師は完全な老衰だと言っていた。

ぼくはその頃、ヒッチハイクで世界一周の途中だった。帰国して祖父には

くが見てきた世界のことをいっばい話したかった。それを祖父も楽しみにしていたことだろう。

中近東イランのテヘラン駅で実家に手紙を出し、何かあったらインドのカルカッタ日本領事館宛に手紙を出して欲しいと書いた。

ガラガラと照りつける太陽の中、カルカッタの日本領事館に行くと、なんと実家から返事が来ていた。ぼくは領事館の玄関に腰掛けて手紙を読んで祖父の訃報を知った。一瞬にしてまわりの風景が灰色の世界になったことを、今でもハッキリ覚えている。

ぼくが子供の頃、祖父に「じいちゃん、人は死んだらどうなるの？死後の世界はあるの？あるとしたらどんな世界なの？」と尋ねた事がある。祖父は奥座敷から庭をじっと見て「あの木を見ろ」と言った。

季節は晩秋であった。紅葉がひらひらと落ちていった。

祖父は「あれと同じだ」と言った。

「ふーん、土に帰るといふことか、死んだら終わりなのか。」

「そう終わりだ、なにもない。」

「じいちゃんは死ぬのが怖くないの？」

祖父は無表情のままで返事はなかった。

今の心情もあるのだろうか？それは祖父の人生観なのか？でもぼくは明治生まれの祖父の強さを感じた。

じゃあなんで家に神棚や仏壇があるんだ。何で毎日祖父は仏壇に手を合わせるんだろう。何で近所の納骨堂に祖父は石灯籠やツツジの苗木を100本も寄贈するのだろう。

ぼくにとって子どもの頃から死後の世界の存在が大問題だった。

なぜなら死んだらすべて終わりというのと、死後も霊として生きて行き得る世界があるのとないのとは、これからの心の持ち方に生き方に大きく関わってくるのだから。

仏壇に神社に手を合わせるにしても、何もないものに手を合わせるのと、霊として生きている人に手を合わせるのとは、全然気持ちが違うではないか。要するにそこに実体があるのかないのか、ここが大問題だ。

そもそも何で仏壇と神棚があるんだ？何で日本には数えきれない位、沢山のお寺と神社があるんだ。その違いは？やたらとあるお地蔵さんって何だ？

子どものほくでも、どうやら死んだ人の目印のようなものだとは理解できたが…。こんな大事で基本的なことなのに、大人も小学校の先生も誰も教えてくれないし、教科書にも書いてない。これはおかしい。まるで秘密のペールだ。

後に戦前は必須科目修身として、神道や仏教が教えられたことを知る。なぜ戦後、廃止されたのが後に驚嘆の事実知ることになる。先ほど少し触れたが後で述べる。

以上のようなベースがあって、私は霊的世界へ答えを探しに純粋な気持ちで探検の旅へ出かけた。

よし！自分が生きてるこの世の中を知ろう！意識を広げよう！

まず日本を知ろう！そして世界を知ろう！

ならば旅だ！この目で世の中を見て感じよう！



日本一周 昭和51年(1976年)

まずはこの目で日本を知るため、高校1年16歳の夏休み、アルバイトで貯めた2万円を握りしめ、日本一周を決行した。その事を両親に話したら大反対されたので、こっそり置き手紙して早朝に出発した。

お金がないのでヒッチハイクだ。当然、泊まるお金もないので野宿をした。行き先は日本海側から北海道最北端宗谷岬を目指した。やっとの思いで宗谷岬に着いた時、ここが日本の最北端かぁーと海をしばらく見つめたことを思い出す。沢山の車を取り継ぎ、取り継ぎ、帰りは太平洋側から帰ってきた。

2週間ワクワクするような楽しい旅だった。国内ヒッチハイクの詳細は省くが、乗せてくれた人が食事をおごってくれたり、中には泊めてくれたりした。青森のねぶた祭を見たあと、ヒッチハイクをしたら、ねぶた祭見物

の家族の方がそのまま泊めてくれたこともあった。「みんな優しくてこんなにも助けてくれるんだなあ～」と実感した、いや感動した。運が良かったのか、危険なことや、イヤな事は、ひとつもなかったな～。

たしか岡山だったと思う。朝ヒッチハイクで停まってくれた軽自動車のおじさんが、「他にいっぱい良い自動車が入ってるのに、こんなボロ車でよかったか？スマンな～」と言われ恐縮してしまった事も思い出す。

おじさんの軽自動車は三菱ミニカーの草色だった。昭和40年前半の型で、今でも旧車博物館で見るときに思い出す。

ぼくの旅は主に海岸沿いを走ったこともあってか、車窓の日本の海岸の風景が美しかった。

また旅費は実質1万円以内ですんでしまった。真夏にもかかわらず、一回も風呂にもシャワーを浴びることこともなかった。無人駅の水道で体を洗った。おごってもらう以外、まともな食事もしなかった。

今思うとゾツとする。ホームレスが無銭の旅をしているようなものだった。

16歳の夏、二週間の日本一周旅行を終えて、日本の風景や各地の人々の生活が自分なりに実感できた。

へえ～、これが日本という所か～。

なんだ、思っていたより日本一周の旅は楽勝じゃないか！よし！次は世界一周だ！

16歳のぼくにはまだ分からなかった。世界が苛酷な現実として待ちかまえていようとは。



元田博物館① 世界一周旅行の手記より

第2章

劇的紀行！ 世界一周の旅！



昭和 54 年（1979 年） 世界一周の旅へ

19 歳大学 1 年の夏の終わり、ぼくはバイトで貯めた資金たしか 30 万円で、ついに海外に向けて日本を出国した。生まれて初めて飛行機に乗りまだ真新しい成田からロサンゼルスに向けて飛び立った。

格安航空券を購入したら、手元には 13 万円の現金が残った。昭和 54 年当時は 1 ドル 220 ～ 230 円くらいだったので、現在の円に換算すると 6 万円くらいだったと思う。

ぼくは楽天家のクセがある。「な～に 1 万円で日本一周ができたんだ、世界一周もなんとかなるさ」と思った。

アメリカってどんな国なんだろうと期待でワクワクしていると、隣の座席のおばさんが話しかけてきた。おばさんはアメリカ人と結婚して、アメリカに長く住んでいるという。

「あなた若いわね、アメリカに旅行？」

「はい 19 歳です。これからアメリカ大陸をヒッチハイクで横断して、ついでに世界一周、地球をぐるり一周する旅です。」

「あなた！アメリカがどんなに危険なところか知っているの？ヒッチハイクだなんてダメよ！ダメダメ！おやメなさい！！」

おばさんは血相を変えてぼくに訴えてくる。

「お金がないんでヒッチハイクしかありません。」

「どこに泊まるの？」

「野宿です。」

おばさんは隣の白人の夫と英語で何やら話し始めた。そのおじさんは手と顔を左右にふって険しい顔をした。テレビで見たアメリカ人が「ノー」という同じ動作だ。

「あなたひとり？英語は話せるの？」

「ひとりです。英語は、話せないですけど、旅行用の英会話ハンドブックを持ってきました。」

「お金はどれくらい持ってるの？」

「600ドルくらい持ってきました。」

「よく聞きなさい！ヒッチハイクは絶対にダメよ！野宿は絶対にダメ！ちゃんと泊まりなさい！アメリカは危険なところよ！そのお金でロスを観光してすぐに帰国しなさい！！分かったわね！！もう心配だわ…。日本と違うのよ！日本みたいに安全な国、世界中探してもどこにもないのよ！」

こんな感じでぼくはおばさんに散々説教された。特に黒人だらけのスラム街というところがあって、そこは最も危険だから近づいてはいけないとか、いろいろなことを聞かされた。何も知らないぼくは黒人恐怖症になってしまった。

10時間以上は過ぎただろうと到着のアナウンスが鳴り、飛行機の中から夕方の薄暗いアメリカ大陸が見えてきた。飛行機はどいどん高度を下げてくる。恐い忠告ばかり聞かされた僕は、まるで奈落の底に落ちていくようなドキドキ感だ。

空港でおばさんが最後に言った言葉は「心配だわ…」だった。



東へ！ アメリカ大陸編

ロサンゼルス空港は経験したことがない広さだった。

エレベーターに乗ると、大男の黒人と2人きりになった。視線があう。マジイ！あのおばさんの影響で黒人の方には悪いが、その時は黒人恐怖症だった。黒人がエレベーターを降りた時はホッと胸をなでおろした。

まず日本円を両替するため銀行に行って換金する必要があった。その辺の人に「バンク、バンク」と言ったら通じなかった。ぼくの発音が通じずにショックだった。「B・A・N・K」とゆっくり大げさに言うと「オォ～ビィヤンク？」と言って指さしてもらったら、ぼくの目の前に銀行があった。

すっかり日の暮れた空港の待合室のイスに座って「どうしよう、これからどうなるのだろう…」ととても不安な気持ちになっていると、東洋人のおじいさんが日本語で話しかけてきた。

「おじいさんは日本人ですか？」

「いや韓国人です。」

「日本語上手ですね。」

「若い頃、京都大学に留学していましたから。」

ぼくは英語が通じずに不安だったが、久々に日本語を聞くと少し気持ちが楽になった。

「お兄さんは観光ですか？」

「はい、アメリカをヒッチハイクで横断しようと思っているんですが…。」

「おお！それはスゴイ！ワッハッハ！」

おじいさんは大きな声で笑った。

「アメリカって、危険な国なんですか？」

「そんな所もあるけど、いい国だよ～。」

おじいさんはニコニコしながら答えた。

それを聞いてぼくは勇気がわいてきた！よし！ロスの空港の玄関からヒッチハイク開始だ！

空港の玄関から外を見ると、見渡す限り砂漠が広がっている。もちろん街灯がないので真っ暗だ。今晚はロビーで一夜を明かすしかないと思った。

すると日系二世のおばあさんがぼくに話しかけてきた。

「あなた日本人？」

「はい日本人です。」

「旅行？ホテルは決まっているの？」

「アメリカを旅しに来ました。まだ宿泊先は決めていません。」

それを聞いたおばあさんはニコリして

「ちょうどよかった。私モーテルを経営しているの。日本人なら、安くしてあげるのだから泊まりなさい。私は空港で友人を待っているの、一

緒に来た孫の車で先に行ってなさい。」

おばさんと空港の玄関で待っていると、今でも忘れもしない、ぼくが当時憧れていた真っ白いリンカーンコンチネンタルマーク5.2ドアハードトップがやってきた。これでもか、というくらいデカイ車だ。おばあさんといっしょにきた孫の日系四世とはまったく日本語が通じなかった。

ロスの空港からロサンゼルス市までは、かなりの距離だった。

町に近づくにつれ、複雑な道路で乗せてもらって本当に助かった。

おばあさんが経営しているモーテルは、以前映画で見たような中央に広いプールがあって、それを取り囲むように2階建ての建物が建っていた。

翌朝、そのおばあさんに宿泊代を聞いてみた。確か日本円で5千円くらいだった。高すぎる！ぼくは旅の資金を節約しなければならないので出て行くことにした。

ぼくはおばあさんに事情を話した。

「ぼくは600ドルしか持ってなく、ヒッチハイクで世界を回ろうと考えています。」

すると、おばあさんはあきれた顔で言った。

「そんなことはおやめなさい。宿泊代を安くしてあげるから、1週間うちに泊まってロスアンジェルスを観光していきなさい！そして帰国するのよ！せっかく花火大会に連れて行ってあげようと思っていたのに…。」

ぼくはおばあさんの親切心に感謝しつつ、ヒッチハイクの旅を続けるため出て行くことにした。心配そうな日系のおばあさんに見送られながら、心の中でこれからが本当の旅だと決心した。

ぼくは大きな道路を探すため、ひたすら歩いた。

フリーウェイに出た。ダンボールに「to east」と書いて、頭上に掲げた。片道10車線位ある巨大な道路に無数の車が走ってた。すると、1台の車が止まった。よし、ここからだ、陽気なアメリカ人の若者だった。英語がまるで通じない。彼もぼくに話すのをあきらめた。

ロスアンジェルスからヒッチハイクで車を乗り継ぎ続け、気がつくとロス

郊外にでた。内陸に向かうにつれて、乾燥地帯というか、砂漠地帯というか、日本のようなどこに行っても緑や山のある風景とは明らかに違う。

これが大陸か。それにしてもアメリカは何もかも、広い、大きい！

ぼくはロスからラスベガスに向かっていた。ヒッチハイクも順調だ。車内では旅行用英会話ハンドブックの例文で乗せてくれる。それが楽しくては仕方なかった。とりあえず、相手がいう事は分からないが、こちらからは伝わるようになった。

また英文にして書いてくれると、なんとなく理解できた。英会話はダメでも英文なら通じることに、アメリカ人は首を傾げていた。日本ではそんな英語教育だったので仕方ない。

とにかく空気が乾燥していて、昼間は要注意だ。窓を全開にして、フリーウェイの風に吹かれていると、段々唇が乾いて、白く薄皮がはげてくる。そのうち、縦に割れてきて血が出てきた。だから常に水分補給して口が乾きすぎないようにしなければならない。

問題は夜だ。つまり泊まるころだ。アメリカは町の郊外にやたらデカイ中古屋があちこちに必ずある。ぼくはそこに目をつけた。夜はそこへいってキャデラックのようなデカイ車の後部シートで寝た。フカフカで最高のベットだ。そして早朝起きて、また、ヒッチハイクを続けた。カギなんか開けっ放しだった。

ある日、キャンピングカー専門店があり、数え切れないほど車が並んでいた。こりゃいいわと思って柵を越え、その夜はデカイキャンピングカーのベットでぐっすり眠った。

早朝、キャンピングカーを出ようとする、大型犬シェパードがお出迎えているではないか！これには参った。しばらく窓から見ていると、口を開けて笑っているようにも見える。しょうがない、意を決して外へ出た。

シェパードはぼくをジッと見つめている。ぼくはゆっくり道路の柵の方へ歩いた。ずっとついてくる。ゆっくり柵を登り超えた。こればかりは本当

に肝を冷やした。シェパードは、尾を振りながらいつまでもぼくを見送ってくれた。

田舎のアメリカ人はシェパードのような大型犬をよく飼っている。しかも何匹も。そして異様に人なつこい。家の中のソファーに堂々と寝ていて、人が来るとまるで挨拶しに来るように寄ってくる。あまりにデカイのでぼくは最後まで慣れなかった。

日が暮れて、暗い砂漠のフリーウェイを走っているともうすぐラスベガスだ。私はそこに立ち寄ることにした。すると何もない夜の砂漠にこつ然と巨大なネオンの光が島のように出現した。ビルそのものがすべて巨大ネオンだ。昼間のように明るい。ぼくは吸い込まれるようにカジノホールに入っていた。

ラスベガスは賑やかでゴージャスだった。映画で見たまんまだ。しかも現実にぼくはここにいる。

人がやっているのを見ていて、ルーレットはぼくにも分かりやすいし、やりたくなった。旅の資金稼ぎが出来ないか、ワクワクした。

ぼくは10ドル（当時2300円位）までと決めてチップと交換した。最初ぼくもよくわからず、勝手にチップが増えたり減ったりしていたが、段々理解できるようになった。10ドルまでと決めていたので、なくなるまで遊ぼうと思った。夢中になって楽しんだ。

途中から勝ち負けより、ゲームを続けることが面白くなった。途中、かなり儲かったが、結局使いきるまで朝方までかかった。まあ一晩遊んでマイナス10ドルなんだからいいやと思った。

途中、若い日本人留学生達と友人になった。彼等はカジノでひどく損していた。一緒に朝食を食べていたら、カジノで大負けしたと言えばタダにしてくれると教えてくれた。彼等は乗ってきた車フォードマスタングをラスベガスで売って、長距離バスでロスへ帰っていった。そんな中古車が郊外に広々と並べられている。

太陽が昇ったラスベガスの町は夜と打って変わって、まるで砂漠の中の廃墟のようだった。幻のような一夜だった。

話は変わるがどうしても言っておきたいことがある。

日本人のギャンブル支出は世界一だ。原因は日本津々浦々のパチンコ賭博だ。取り締まるべき警察官僚と利権で守られている。何の生産性がないどころか、犯罪の温床となって日本社会を日々、腐らせている。生産しているとすればそれは人々の不幸だ！ましてやカジノ構想なんてとんでもない。ラスベガスを作ってどうする！

ある州に入るとヒッチハイクをしても、まったく車が止まらない。私は広大な砂漠の真ん中で困っているとパトカーがやってきた。なんとこの州はヒッチハイク禁止だった。ポリスマンの善意でパトカーで駅まで送ってもらえることになった。その時、私は片言の英語が話せるようになっていた。

パトカーの中は中央にライフル、ショットガンがあり、しかも何度も銃撃戦を経験したかのうのように、傷だらけですり減っていた。ヒッチハイクで泊めてもらった家の中にも普通に銃がたくさんあった。改めてアメリカは銃社会だと実感した。

そのポリスマンはカウボーイハットの大男でカッコ良かった。そのポリスマンは、砂漠にポツンとあったマクドナルドのような所に止まると、ハンバーガーと飲み物をおごってもらったのを思い出した。

車でずいぶん走ってようやく駅に着いた。彼は列車に乗りなさいといった。

イエスと言った。ポリスマンには悪いが、さっそく街のはずれのフリーウェイまで歩き、またヒッチハイクの旅を再開した。

ヒッチハイクで乗せてもらおうと、「アメリカは好きか？」とよく聞かれた。「イエス、オフコース！」と答えた。するときまって上機嫌で「アメリカはいい国だろう！」と笑う。

アメリカ人は陽気で親切な人が多かった。でも素朴でシャイな人もいた。

まあぼくのような、見ず知らずの人間をヒッチハイクで車に乗せてくれるくらいだから、良い人ばかりだろう。

ワイオミング州の乾燥地帯の小さな街を訪れたときだった。ヒッチハイクで乗せてくれた男性が、ぼくを泊めてくれることになった。

まず、家族をひとりずつ紹介してくれ、次に家の中を案内してくれた。そしてテレビやステレオ、ビデオカメラ等を自慢気に見せびらかして、「アメリカはスゴイだろう。こんなの日本にはないだろう！」と言われた。なんとすべて日本のメーカーだった。なんか悪いので、ぼくは大げさに「イエー〜ス！」と大きくなずいた。

彼はボロいマットをどこからか引きずり出して寝て、ぼくは彼が使っているフカフカのいいベッドに寝かせてくれた。彼には日系人の婚約者がいるそうで、その縁で日本人を大事にしたいと言っていた。

ひとつだけ特記したい事がある。その家には広い地下室があって、そこには巨大な冷蔵庫があった。干し肉や缶詰などが、中にぎっしり詰まっていた。もしもの時の食料備蓄だという。男性が言うには、どこの家庭も同じように備蓄をしているそうだ。

アメリカは世界最大の食料輸出国だ。一方我国日本は世界最大の食料輸入国である。日本人は食料確保に対して無防備すぎるのではないだろうか。そこの家にも普通に銃が置いてあった。個人の防衛意識が日本人とまるで違う。仮にこんな国へ攻めに行ったら、絶対にやっかいだ。

旅の途中に、ナイアガラの滝を見にカナダに入った。滝というよりバカでかい大河の断層だ。

ナイヤガラの滝を見物していると、久しぶりに日本人の観光客の団体と出会った。みんな小奇麗な格好をして、旅行を楽しんでいるかのうように微笑んでした。あれが本来の旅なんだろう。それに比べ、ぼくの旅は修行のようなものだった。

日本人観光客は次々と高級そうなレストランに入っていく。ぼくは食費節

約のため、食料品店でカタいフランスパンと牛乳だけだった。

アメリカ大陸のど真ん中を車で走っている時のことだ。時間は深夜。360度見渡す限り明りはない。植物もない。

乗せてもらった人が車を止めた。

「これからおれは南のルートに行く。おまえは東に行くのだから、ここでお別れだ。グッドラック！」

そう告げられ、ぼくは車を降りた。そして車のテールランプは地平線に消えていった。

巨大な岩山が月明かりに照られされてうっすらと見える。ぼくは東に向かって道をひたすら歩いた。まったく車が走ってないので、ヒッチハイクができなかった。

周りはシーンと静まり返っている。あまりの静寂さに恐怖がこみ上げてきた。どんな野生動物が岩陰に隠れ、突然ぼくを襲ってくるかもしれない。

途中、歩き疲れたので座って休んでいたら寒くなってきた。この地域は昼間は50度近くなるのに、夜は0度近くなって急激に寒くなる。疲労と寒さで休憩したいが、凍えないためには歩き続けるしかなかった。

そういえば、ピューマ（黒ひょう）が北米にはいる。ガラガラへびもいる。本能的に恐くなった。

ぼくが向かう方向の先に車のヘッドライトの明りが照らしてきた。振り向くと大型トレーラーが後ろから走ってくる。少ないチャンスだ！ぼくは必死に両手を振る。巨大なクラクションとともに、ものすごい風圧で大型トレーラーが走り去っていく。この繰り返しだった。

夜だしドライバーもそりゃ用心するのだろう。朝まで歩くしかないか。

絶望を感じながらひたすら東へと歩いていると、向こうから車が止まった。

「ハイ ユー ファットアユードゥーイング？（なにやってるんだ？）」

ぼくは疲労と寒さの中、必死に答えた。

「ヘディングトゥイースト！（東へ行きたいんだ！）」

とになった。その後、彼らとインドのカルカッタで合流する約束だったが、結局グループの一人とも会うことができず日本に帰ってしまったらしい。

日本へ帰り、しばらくして会えなかった人に連絡したら、彼はインドで病気になりインドで半年入院し、日本に帰国後も入院しているとの事だった。

また20代後半くらいの人が出て、素性をまったく語らず寡黙な人がいた。ぼくは旅人には見えなかった。ぼくが今まで接してきた旅人は、自分をさらけ出して夢や体験したことを語る人が多かった。

「これからどこに行くのですか？」と聞くと「ヨルダン」とだけ言って後は何も語らなかった。後にある人にこの話をしたら、たぶん極左の日本人で兵士としてヨルダンへ向かっていたのだらうと言われた。

いろいろな情報が飛び交う中、ぼくは「まぼろしのルート」という言葉に引かかった。東から来た人たちが誰も通っていない南のルート、ここイスタンブールからトルコの首都アンカラ、イランの首都テヘラン。それからイスファーフアンを経てパキスタンのクエッタへ行くルートだ。このルートが果たして安全でちゃんとつながっているか分からない。アフガニスタンのルートが本ルートで、みんなそのルートに行く。

ぼくは「まぼろしのルート」という言葉にロマンを感じてあえてこのルートを選択した。そして想像を絶する過酷な世界を経験するとは…。



まぼろしのルート 中東編

イスタンブールの激安宿で共に宿泊した日本人旅仲間から別れ際に「日本人であのルートに行くのはあんたぐらいだろう！」と言われた。その言葉通り「まぼろしのルート」を通る途中、本当に一人の日本人にも出会わなかった。

ぼくは意を決してイスタンブールを出発した。アンカラを経てトルコを横断した。トルコはまだヨーロッパの雰囲気があったがイランに入るとガラリと別世界になった。

乾燥地帯から完全な砂漠地帯となったのだが、ここは全てが異質に感じた。ここは時間が止まっているというか、時代が止まっている。

イランの首都テヘランの中心部に行くと、大通りが数千人、数万人？の規模ですべて埋まっている。女性はみんなニカブという目の所が少し開いている全身黒尽くめの服を着ている。

ぼくは大通りを横切ろうにも、人が多すぎて身動きが取れない。大通りのはるか先まで人で埋め尽くされていた。

突然すべての人が同じ方向に向って、ひざまづいたり立ったりしてお祈りを始めた。遠くを見るとあちこちに当時のイランの指導者ホメイニ師のドでかい肖像画が掲げられていた。コーランか何か分からないが、独特のイスラム教のお経のような音声が、あちこちのスピーカーから大音量で流れている。ぼくは見たことない光景に圧倒された。

ぼくは旅というより、ただ移動が中心だった。お金があれば飛行機や列車の高級シートで有名な観光地を回るだろうが、ぼくはイギリスで貯めた15万円で日本に帰らなければならない。だからヒッチハイクや安いバスや三等席列車や貨物車両のような格安の移動方法で、節約をしなければならなかった。

食事も現地で一番安い大衆食堂のようなところで、羊肉を調理したシシカバブーという料理を食べていた。ハッキリ言ってまずい。味付けは塩とトウガラシだと思う。米もパンもパサパサでおいしくない。そして見るからに不衛生だ。ただエネルギー補給のため、食べ物を腹に詰め込む。食事というよりエサだった。そして、ぼくは常に下痢状態だった。

ただ、コココーラは不思議とどこにでもあった。コーラとならまずい肉も腹に流し込む事ができた。でもコーラ代がもったいないので、たまにしか飲まなかった。現在、世界中で日本食がブームらしいが、そりゃそうだろう。

テヘランの街を歩いていると、ちょっとオシャレな路地があった。なんとその路地はヨーロッパの雰囲気や若い女性がたくさん集まっていた。女性たちの姿はジーンズにTシャツ、ハイヒールで、BMWも止まっている。後に親欧派だったハーレビ時代の名残りだと知った。

イスラム教の人達の祈りは熱心だ。なぜそこまで祈るのだろうとその時は不思議に思ったが、ぼく自身が過酷すぎる砂漠で同じ境地になり、祈り続けることになるとは、この時は夢にも思わなかった。

首都テヘランからいよいよ南のルートへ向かうことにした。

とにかく、とんでもないくらい、見渡すかぎりの砂漠がぼくの目の前に永遠に広がる。それは一瞬その場に立っただけで、生命の恐怖を感じるくらいだった。太陽が恐怖の輝きを感じた。ヒッチハイクなんてとんでもない。照りつける太陽の下、ここを進めば確実に死ぬ。

まず車が走っていないし人もいない。道路というよりだたの砂利道で、進路の目印のように小石がところどころに積まれているのが、どうやら道のようにだった。本当にそれだけだった。ぼくは劣悪な状況の中、唯一の交通手段だったバスで移動することにした。

バスは砂利道の小石を目印に走ってく。当然道路はデコボコで上下左右へとバスが揺れる。デコボコに入るとドーンと突き上げられ、しょっちゅう腰が宙に浮く。車内は超満員で通路にも人がひしめき合っていた。

南へ行くにつれ、ただでさえ暑いのにさらに気温は上昇する。もちろんエアコンはない。車内は人の熱気や砂埃などで最悪の状況だった。

そして夜は気温が一気に冷え込む。砂漠に生物の気配は全くなく、怖いくらい静まり返っている。空気は乾燥しきって喉がカラカラになる。もしここで放り出されたら確実に生きてはいけない。ここはアメリカのネバダ砂漠を遥かにしのぐ、過酷すぎる自然だ。

ぼくはそのような過酷な環境で、どんどん体力が奪われていった。どこまでも続く砂漠の地平線に、太陽が沈んでいく光景を、意識が朦朧としながら眺めていた。日が暮れて突然バスが止まった。

そこは火がたかかっている小さな村のようだった。武装した兵士がバスを取り囲んだ。バスに乗っている外国人にアメリカ人がいないか、探しているという。白人の若い男女が4、5人乗っていた。ぼくも銃を突きつけられパスポートを見せた。当時はホメイニ革命で反米一色であった。

中近東のイスラム圏の一般人は、アメリカ人とユダヤ人に敵対心を持っているようだった。兵士に銃を突きつけられた白人はとても怯えていたが、どうやらドイツ人のようだった。もしアメリカ人だったらどうなっていただろう。

また、トイレ休憩でバスが止まった。もちろん整備されたトイレなんてない。砂漠なので遮るものは何もない。男性はいいかもしれないが、女性は大変そうだった。若いドイツ人女性は遠くまで歩いて行って用をたしていた。

ぼくはバスの振動とすし詰めの中での開放感から、しばらく砂の上で休んでいた。すると、なぜかみんな次々にバスの中に乗り込んでいく。まだ休憩時間はあるはずだ。

出発時間になりバスに戻ると、すでに車内に入れないほど満杯だった。運転手が車内は満杯だからバスの屋根に登れと指で上にさした。バスの屋根は荷物がたくさん積み上げられ、そのスキマに人が乗っていた。

最初は「ここは見晴らしがいいな、開放的だな」と思っていたが、バスがどんどんスピードを上げていくと、デコボコにはまるたびにドーンと突き上げてくる。それも座席に座っている時よりも大きな振動だった。バスから振り落とされないように、荷物に全身でしがみついていないと危険だった。猛スピードで砂利道を進むバスの後方を見ると、まるで飛行機雲のように砂埃が尾を引いていた。

ブッダガヤはシャカが悟りを開いたと言われる場所で、仏教発祥の地とされる。

ここで仏教について簡単に説明すると、今から 2500 年前にシャカ族がいて、そのシャカ族の王子がブッダである。ところが戦乱でシャカ族は滅亡してしまう。恵まれていた生活は一変！王子ブッダは命からがら逃げ惑い、乞食同然の生活を余儀なくされる。そして次第に飢餓状態となり、川辺でぐったりと死にかけていた。

近くで見えていたひとりの少女が、ブッダを救ってあげたくても自分も貧しいのでどうすることもできない。そこで自分の母乳を与えてブッダは生き返ったという。

その後ブッダは自分の人生やこの世を儚み瞑想を続けた。そして、ある時ついに悟りの境地に達するのだった。

ブッダはその悟りを教え広め、やがて仏教が生まれた。ブッダの教えを実践して悟りを開けば、誰でも同じように悟りの境地にいける。つまりブッダになることができる。それが成仏できるということにつながる訳だ。

では悟りとはなにか？ 仏教では大宇宙の真理(ヒンズー教でオウムという)だという。大宇宙の真理を悟り、魂が覚醒する。すなわち仏性(仏のこころ)に目覚める事だという。道徳的に仏のこころとは、先ほどの少女が母乳でブッダの命を救った真心(あわれみの心)であろう。

ところがブッダの真理の悟りをめぐって 2000 年以上の間に万卷の書が記され、その影響からあらゆる宗派が生まれ続け、世界の 3 大宗教のひとつと言われるようになる。実は仏教はブッダの死後 500 年たって出現したという。

その後、仏教は我国に奈良時代 6 世紀に伝わったとされる。それまで日本で信仰されていたのは神道のみであった。我国もインドと同様に万卷の書が記され、あらゆる宗派が現在に続き、歴史や国柄に多大な影響をおよぼしている。

ぼくはブッダガヤに数日滞在した。風光明媚で静かな農村だった。

じを見ていた友人と男同士抱き合って「誰ですか？警察を呼びますよ！！」とぼくを見て恐怖に震えていた。

「オレだよオレ、さっき日本に帰ってきた。」

「えっ？誰？知らないです！」

「オレたい、オレ。」

「もしかして元田？おお！元田かよ！！？オマエ生きてたのか！浮浪者かと思った！ビックリさせんなよ！」

その晩は無事安徳君の下宿に泊めてもらった。

その晩、テレビを見ていた安徳君が成田空港は大変だったんじゃないかと言う。その日の夕方、イギリスの有名歌手のポールマッカートニーが成田空港で来日したのだが、マリファナ所持が発覚し、入国が拒否されたニュースで大騒ぎだったそうだ。だから空港内は人が多かったのだ。

イギリス人のポールは日本の税関を突破できなかった。だが日本人のぼくはイギリスの税関を突破した。いや世界中の国境を突破したのだ。ぼくはこの旅で突破力を鍛えられた。それはその後の人生にもいろんな形で発揮されることになる。

安徳君から「頼むから銭湯へ行って体をきれいにしてくれ」と泣き込まれた。でもぼくはもう歩く体力すら残っていない。限界だった。彼には申し訳ないが、水を飲んで彼の布団で寝させてもらった。とにかく泥のように寝た。

翌日の昼ごろ彼に起こされた。まだ体は重たいが、歩ける位に回復した。腹が減ったので、彼のおごりでチャンポンを食べた。とてもうまかった。日本のものは何でもうまかった。

東京の大学に上京している田舎の同級生たちが、興味津々で集まってきた。なんと彼らはぼくが旅から生きて帰ってくるかを賭けていた。ぼくは安徳君に、イランから内戦の状況を生々しく書いた絵はがきを送っていた。それを見た彼は、生きて帰るのはムリだと思いダメな方に賭けていた。

問題は仕事だった。求人誌を見て、ぼくのヒョロヒョロの肉体と精神力を鍛えるためにあえて土木作業員を選んだ。その中でも一番日当の高い会社に面接に行った。一番ハードな仕事内容なのだろうと推測したからだ。だが、社長はぼくの体をなめ回す様に見て、止めとけと言わんばかりの目つきで言った。

「ウチの仕事はきついぞ？並の土方とは違うからヨ！3日以内にみんな辞めていくので有名なんだぜ！オマエ19歳の学生か。体はやせてんな。ウチの仕事はムリ

じゃねいのか？」

「お願いします！ぼくをここで働かせてください！」

「そんじゃあ明日の朝8時、この会社にこいよ！」

仕事内容はツルハシとスコップを使った穴堀と、それに伴う道路舗装だった。東京の地下は多くの管が埋まっていて、重機で掘り返すと破損する危険性がある。なのでほとんどが手作業での仕事となる。毎日4トンダンプに8トンくらいの土石を手作業で積み込んだ。先輩たちは裸になるとボディビルダーみたいだった。ぼくは体を鍛えたかったので黙々と作業した。

夜は大学で仏典の講義と座禅があった。まさに動と静の1日だ。寝る前と休日は貪るようにいろんな本を読んだ。ぼくは自分の無知を知り、さまざまな知識に飢えていた。毎月の書籍代は5万円位だったが、収入も多く酒とかの他の遊びもしなかつたので、生活に余裕が生まれた。自分でいうのもなんだけど、まじめに生活し懸命に働いた。

3ヶ月たって社長がぼくの働きぶりを見て、満面の笑みで話しかけてきた。「オマエ見かけによらねえな！1日で辞めると思ってたぜ！3ヶ月も続くなんで大したもんだ！これから本格的に重機の運転とか教えていくからよ！どんどん仕事覚えていけよ！日給も上げてやっからよ！」

と言われた。ぼくは社長に認められた。

「先生は酒もタバコもやらないですか？」

「やらん酒はお祝いの時だけ少し飲む。本当は酒は強いじゃぞ。日頃は飲まん。オマエの心に酒やタバコのクセがついとるんじゃ、だから心が欲しがるのよ。」

「あの～死後の寿命については……？」

「人間は肉体を持つとるやろ。自分の肉体の事ば～っかりの人生はな、死後の寿命が短くなるんじゃ。」

「なぜですか？」

「目標がなくなるからよ。」

「目標？」

「いつも統一会で言っておる、オレがオレがの凡人には、金や地位や名誉は肉体を維持するためじゃろ。こないだも言うたように、肉体を維持する為、美味しいもん食って、快適な家に住んで、なおかつそれを維持する為には金が必要じゃ。しかもその状態をさらに安定的にする為に地位や名誉を欲しがるんじゃ。それで、その肉体失ったら、肉体維持という目標も同時にのうなるわな。だからそんな人生歩んだ者は死んだ後目標がなくなってフラフラになるんじゃ。オマエもそうならんようにしろよ！ハッハッハッ！」

「ならば何を目標に生きていいんですか？」

「自分以外の目標を自分の目標にすることじゃ。自己を超えた目標を掲げて生きるんじゃ。」

「先生がこないだおっしゃった価値の創造という、宇宙の真理とともに生きれば宇宙とともに我の靈魂は永遠なんですか？」

「あ～永遠に生きるな～。」

「でもこの世で一番欲張りな生き方ですね…。」

「無念無想にあらず、無我一念じゃ。」

「肉体寿命なんて小欲に生きないで、精神寿命の大欲に生きなければならぬんですね！じゃあ 2500 年に生きておられた、仏陀ブツダは今も生きておられるんですか？」

「生きておられるぞ。増々活発に、人々を救っておられるでな。ものすごいエネルギーじゃ。仏様はな、生きておる時、悟られて、自己を犠牲にし

てでも衆生を救われておられたんじゃ。だから自分の肉体が減んでも悩み苦しむ衆生がいる限り、目標が存在し続けるじゃろ。だからその目標の為に永遠の魂となって活動されておられるんじゃ。」

「具体的に生きておられる時、どうやって衆生を救っておられたんですか？」

「神通力よ。」

「仏様は生きていた時すでに神通力があったんですね！」

「当たり前じゃ。悟りと同時進行で神通力は出現する。仏様くらい大悟されると神通力も相当じゃ。だから同時の人はビックリして、大勢、救いを求めて集まったんじゃ。仏様はな、悟りを開いた神通力者だったのよ。それを後の人が500年も経って仏様を教祖にして仏教という宗教をこしらえたのよ。とにかく今でも仏様のエネルギーはすごいんじゃ。」

「エネルギー？ 霊魂もエネルギーがいるんですか。肉体は食べ物たべて、水のんで空気すってエネルギーにしますけど、霊魂は何をエネルギー源にするんですか？」

「まずな、肉体もって生きておる時、魂にエネルギー貯めこんでおくのよ、だから大昔の人は精神統一して魂を清め、祈ることで念力を強化したんじゃ。魂を強くしたんじゃ。それでな、生きておる時、人を救ったり、世の中の為に生きた人はな、後にあの方のおかげじゃと言うて拝むじゃろ。感謝の真心を捧げるじゃろ。それが霊魂のエネルギー源になるんじゃ。だから弘法大師、空海のような偉大なお方は、1200年間拝み続けられてはおられるわな、エネルギーをもらい続けている状態じゃろ。だから生きておる時以上に活発に、人々と衆生を救う事が出来るんじゃ。まあ弘法大師、空海ほどの神通力者はな、ドえらい神通力が必要な時は生きていた人間の生命力を時々使うこともできるでな〜。」

「へえ〜そんな偉い人はそうとして、普通の凡人はどうなんですか？」

「いっしょの事よ。先祖を拝み、子孫の為に一生懸命生きておるじゃろ。だから死んだあとも子孫から感謝の誠で手を合わせられる、それがエネルギーになって霊魂は活発になるんじゃ。普通の人生を歩む人はな、そうやってズーッと自分の子孫を見ておるよ。」